

## 2022年3月期 決算電話カンファレンス 主な質疑応答記録

日時:2022年4月28日(木)12:00 ~ 13:00

出席者:代表取締役 社長執行役員 横田 浩

代表取締役 専務執行役員 経営企画本部長 杉村 英男

### <2022年度予想の前提について>

- Q: 石炭・金属ケイ素ほか、原燃料価格のイメージについて教えてほしい。石炭について、トクヤマはロシア炭を購入していないという理解だが、従来ロシア炭を購入していた会社が他国の石炭に切り替えることによって、調達リスクが脅かされることはないか。また、石炭価格(FOB)の足元の価格は約300ドルであり、従来均衡していた為替感応度も影響が出てくるのではないか。
- A: 石炭は通期250ドルの前提。当社はロシア炭の調達はなく、オーストラリア炭、インドネシア炭がメイン。先の見通しは難しいが、今のところ調達できない状況ではない。  
金属ケイ素の価格は2021年秋～年末にかけて従来の7~8倍の水準になり、2022年に入り少し落ち着いたものの4~5倍くらい水準を維持している。2022年度も、従来の3~4倍くらいの価格上昇を想定している。  
為替感応度は従来均衡していたが、石炭価格が大きくなると買い掛けのドルが大きくなる。為替前提は125円としているが、10円動くと15~20億円ほどインパクトがある。

### <価格修正状況について>

- Q: 石炭・金属ケイ素の価格高騰に伴うセメント・シリコンの価格修正状況を教えてほしい。
- A: セメントは今年2月からの値上げに対して一部満額回答を得たところもあり、浸透が進み始めている。全体で満額には至っていない状況の中、石炭がさらなる高騰をしている。2022年度上期中に取り切れていない部分を上げるとともに、追加の価格修正も視野に入れている。  
シリコン関係は金属ケイ素に加えて需給がひっ迫しており、2021年度下期で2割程度の価格修正を実行した。2022年度においても価格修正を進めていく。金属ケイ素のほか、石炭の高騰によるコストプッシュもある。需給バランスも勘案し、お客様には受け入れていただけるものと考えている。
- Q: 2022年度予想における価格修正の織り込みについて、現時点での進捗と今後の進め方を教えてほしい。
- A: 化成品は増収幅に近い金額を価格修正として織り込んでいる。電子も増収のうちかなりの部分が価格によるもの。また、新たに中国でICケミカルの仕事が立ち上がってきていて売上がプラス。セメントの値上げは1,000円+αを織り込んでいる。進捗率としては、セメントが半分、電子材料はもう一押しで、IPAについては鋭意交渉中。化成品はかなり進んでいる。

### <2022年度予想 コストアップ要因について>

- Q: 2022年度予想 営業利益増減分析の「その他」のコストアップ要因を教えてほしい。原燃料のコストアップを値上げで吸収できるということなら、増益になってもなりそうなどころ減益となる要因は何か。
- A: 減価償却費、研究開発費は想定通りだが、DX費用で10億円程度の増加を予想している。また、2021年秋以降高騰した金属ケイ素について、2021年度はたな卸資産として計上されていたが、2022年度は製品化され、原価に入ってくる。そのコスト上昇がかなり大きい。

<2021 年度・2022 年度税金費用・最終利益について>

Q:2022 年度予想の最終利益が 2021 年度に比べて減益となっているのはなぜか。

A: 2021 年度は繰延税金資産を約 45 億円積み増し、税金費用がマイナスとなったが、2022 年度は通常の法人税の計算になる。

以上